

# 展覧会「シュタイデルとの本の作り方」について

---

東京都写真美術館 学芸員

伊藤貴弘

# 展覧会 「シュタイデルとの本の作り方」 について

伊藤貴弘

## はじめに

2013年4月11日から10月13日にかけて、韓国・ソウルにあるデリム美術館（Daelim Museum）で「シュタイデルとの本の作り方」（“How to Make a Book with Steidl”）と題した展覧会が開催された。<sup>❖1</sup>【図1】シュタイデルはゲルハルト・シュタイデル（Gerhard Steidl, 1950-）によって1968年に設立されたドイツ・ゲッティンゲンの出版社で、これまでに写真集を中心とした数多くの美術書を世に送り出している。展覧会「シュタイデルとの本の作り方」では、ロバート・フランク（Robert Frank, 1924-）やエド・ルシュエ（Ed Ruscha, 1937-）といったアーティストとの共同作業を例に、一冊の書籍ができあがるまでのプロセスが紹介され、紙上の表現をめぐるアーティストのこだわりとゲルハルト・シュタイデルの卓越したディレクションを知ることができた。本稿では展覧会を振り返ると共に、シュタイデルというたぐいまれな出版社の成り立ちとその歩みについて書き記したい。

## I. シュタイデル社の成り立ちとその歩み

シュタイデル社を設立したゲルハルト・シュタイデルは1950年、ドイツのゲッティンゲンに生まれた。シュタイデルが生まれ育ち、現在では自社の本社を構えるゲッティンゲンはニーダーザクセン州に属し、ドイツのほぼ中央に位置している。職人として働く両親から影響を受け、大学に進学することなく学業を終えたシュタイデルは、結婚式のカメラマンや演劇のポスターのデザイナーとして働いていたが、1968年、18歳のときに訪れた展覧会で、アンディー・ウォーホル（Andy Warhol, 1928-1987）のスクリーンプリントによる作品を見たことがきっかけとなり、印刷技術に対して強い関心を示すようになった。同年、シュタイデル社を設立。翌年にはゲッティンゲンに印刷所を設け、「デザインから製本まですべて自社で行う」<sup>❖2</sup>現在のスタイルが始まることになった。

1970年、シュタイデルは政治的な問題をテーマとしたポスター作品で知られるグラフィックアーティスト、クラウス・シュテーク（Klaus Staeck, 1938-）と知り合い、ほどなくして彼の作品制作を手

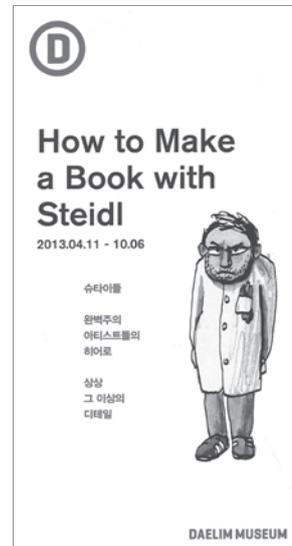


図1 「シュタイデルとの本の作り方」展  
リーフレット

❖1 当初、予定されていた会期は2013年4月11日から10月6日までだったが、会期が1週間延長された。なお、同名の映画が2010年にドイツで公開され、日本では邦題を「世界一美しい本を作る男」（How to Make a Book with Steidl）として2013年に公開された。展覧会はその内容を発展させたものとなっているが、本稿では、アーティストの側からシュタイデルの本作りを検証した展示内容を考慮し、展覧会名を「シュタイデルとの本の作り方」と訳出した。

❖2 映画「世界一美しい本を作る男」予告編より。  
<http://www.youtube.com/watch?v=JXtavJc2law>  
(最終アクセス 2013年12月30日)

- ❖3 Kerstin Stremmel (ed.), *How to Make a Book with Steidl*, exh. cat., Göttingen: Steidl in association with Daelim Museum, 2013, p.226.
- ❖4 *ibid.*, p.227.
- ❖5 1969年、西ドイツではヴィリー・ブランド (Willy Brandt, 1913-1992) が首相となり、歴史上初めてドイツ社会民主党出身者による政権が誕生した。外交では初の東西ドイツ首脳会談を実現させるなど、共産主義諸国との関係改善に尽力する一方、国内では「より一層の民主化を目指そう」(“Wir wollen mehr Demokratie wagen”) というスローガンを掲げ、行政改革に乗り出した。
- ❖6 Stremmel (ed.), *op. cit.*, p.227.
- ❖7 *ibid.*
- ❖8 Klaus Staeck, *Befragung der Documenta*, Göttingen: Steidl, 1972.
- ❖9 ドイツ・カッセルで4年もしくは5年に一度開かれる国際美術展。第5回目となる1972年の「ドクメンタ」は6月30日から10月8日にかけて開催され、芸術監督をハラルド・ゼーマン (Harald Szeemann, 1933-2005) が務めた。ヴィト・アコンチ (Vito Acconci, 1940-) やジョン・ジョナス (Joan Jonas, 1936-) など計218名の作家が参加し、インスタレーションやパフォーマンスが数多く行われた。詳しくはキュレーターのアリス・ウルリッヒ・オプリスト (Hans-Ulrich Obrist, 1968-) によるゼーマンのインタビューを参照のこと。アリス・ウルリッヒ・オプリスト、村上華子訳「キュレーション」フィルムアート社、2013年、pp.112-144
- ❖10 1974年1月に初めてボイスがアメリカを訪れ、ニューヨーク・シカゴ・ミネアポリスの大学でレクチャーを行った際は、シュテークとシュタイデルも同行し、その道中をビデオカメラで記録した。詳しくは以下を参照のこと。Klaus Staeck, Gerhard Steidl, *Beuys Book*, Göttingen: Steidl, 2012.
- ❖11 ラガーフェルドがディレクターを務めるシュタイデル社傘下のレーベルとして、2000年にEdition 7L、2010年にL.S.D. が設立された。

がけるようになる。その出会いについて「印刷屋や版元にしては珍しく、シュタイデルは政治的な事柄に関わっていて、アーティストとして理想的なパートナーだった」とシュテークが述べているように、彼らは単なる依頼主と業者の関係に留まることなく、思想的な部分で共鳴し、ニュルンベルクなどでポスターを用いたアート活動を展開する。「民主主義とはただ見守るものではなく、参加するものだ」と人々が認識し始めた<sup>❖4</sup>とシュテークが振り返るように、当時は「政治の季節<sup>❖5</sup>」であり、「特定の政党を支持するのではなく、独自の方向性を示そうとする人々<sup>❖6</sup>」にとって必要なのは、「自らの政治的信条を伝える視覚的要素<sup>❖7</sup>」であった。まさにシュテークとシュタイデルという組み合わせは、彼らにとってうってつけの存在であり、二人は次第にそうした要望にも応えることになる。

1972年、シュテークはシュタイデル社より同社初の出版物となる『ドクメンタへの問いかけ』(*Befragung der Documenta*)<sup>❖8</sup>を刊行する。これを機にシュテークとシュタイデルの関係はますます密接なものとなっていき<sup>❖9</sup>、シュテークはシュタイデル社にもう一つの広がりをもたらした。それが1972年の「ドクメンタ5<sup>❖9</sup>」にも参加したヨーゼフ・ボイス (Joseph Beuys, 1921-1986) との出会いである。シュテークを介してボイスと知り合ったシュタイデルは、やがてボイスの版画作品の制作も手がけるようになり、その協力関係は1986年にボイスがこの世を去るまで続いた<sup>❖10</sup>。ボイスとの仕事を通じて培われた数々の技術はシュタイデル社にとって貴重な財産となり、後年の写真家たちとの共同作業へとつながっていく。

1980年代には文芸書の出版も始め、ノーベル賞作家ギュンター・グラス (Günter Grass, 1927-) の特装本のほか、イギリス・フランス文学作品のドイツ語訳をペーパーバックのシリーズとして刊行した。また、同時期にはシャネルやフェンディなどファッションブランドのカタログ制作も担うようになり、両ブランドのデザイナー、カール・ラガーフェルド (Karl Lagerfeld, 1933-) とは現在まで続く信頼関係を築くことになる<sup>❖11</sup>。

そして、1990年代の中頃から写真集の出版に力を入れ、その目録は写真史を概観するような幅広い顔ぶれとなっている。オットー・シュタイナート (Otto Steinart, 1915-1978) を始めとする国内の写真家やリー・フリードランダー (Lee Friedlander, 1934-) など各国の名高い写真家が揃うラインナップの中で、一際多くのタイトルが刊行されているのがロバート・フランクであり、デリム美術館で開催された「シュタイデルとの本の作り方」展においても十分なスペースが割かれていた。次章ではその展覧会を振り返り、シュタイデルとアーティストの本作りの軌跡をたどりたい。

## 2. 展覧会「シュタイデルとの本の作り方」について

会場となったデリム美術館は2002年に開館し、韓国有数の財閥であるデリムグループ (Daelim Group) の文化財団が運営を行っている。開館以来、写真やプロダクトデザイン、ファッションを中心に年間約三つの展覧会を開催し、2013年は「シュタイデルとの

本の作り方」展とアメリカの写真家ライアン・マッギンレー (Ryan McGinley, 1977-) の個展「魔法のレンズ」(“Magic Magnifier”) が開かれた。[図2]

元々は邸宅として使用されていた4階建ての建物を改装したデリム美術館は、1階が受付、2階から3階が展示室、4階がイベントスペースとなっている。「シュタイデルとの本の作り方」展は2階から展示がスタートし、4階のイベントスペースも展示室として活用されていた。まるで出版目録のように細かく分けられた展示室を順番にめぐり、展示会の全体像をつかみたい。

## 2-1. コト・ボロフォ、ジム・ダイン、ギュンター・グラス、 ダヤニータ・シン——2階の展示について

展示会の導入となる2階の最初のコーナーには、シュタイデル社内で働く人々の姿を写した写真が展示されていた。これらは南アフリカ生まれのファッション写真家、コト・ボロフォ (Koto Bololo, 1959-) によるもので、その大部分は2010年にシュタイデル社より刊行されたボロフォのシュタイデル社訪問記<sup>12</sup>からの写真である。そこにはグラフィックデザイナーや編集者、スキャニングオペレーターにプリンターなど、専門的な技術を備えた様々な職種の人々が登場し、シュタイデル社がデザインから製本まですべての工程を自社で行っている様子を垣間見ることができた。

続いて展示されていたのは、シュタイデル社とイギリスの雑誌『ウォールペーパー』(Wallpaper) がコラボレーションして発売された「紙への情熱」(“Paper Passion”) という名の香水。刷り立てのインクの香りをイメージして調香されたこの香水は、発色や質感だけではなく、香りについてもこだわりを見せるシュタイデルの「紙への情熱」を表している。パッケージのデザインはラガーフェルドが手がけているが、シュタイデルが香りについてもこだわるきっかけとなったのは、シャネルの香水のカタログを作っていたときにラガーフェルドが言った「刷り立ての本が放つ匂いは世界で一番の香水だ<sup>13</sup>」という言葉であった。

香水の向かいの区切られたスペースでは、絵画や版画、彫刻など多面に及ぶ活動で知られるジム・ダイン (Jim Dine, 1935-) の小展示が行われており、ダインによるシュタイデルのポートレートのドローイングや、2012年に刊行された作品集<sup>14</sup>が展示されていた。

ダインの小展示のあとに現れるのはノーベル賞作家ギュンター・グラスがこれまでにシュタイデル社から刊行した書籍を一堂に会したスペース。ガラスケースに表紙や見開きページの挿画が陳列され、壁面には童話集を編纂したグリム兄弟の功績をめぐる『グリムの言葉』(Grimms Wörter)<sup>15</sup>に使われた、グラスの手による色彩豊かなアルファベットのレタリングが掲げられていた。

そして、2階の最後のスペースには、インド生まれの写真家ダヤニータ・シン (Dayanita Singh, 1961-) の蛇腹式写真集『セント・ア・レター』(Sent a Letter)<sup>16</sup>とクロス装の表紙で10色もの色違いがある『ファイル・ルーム』(File Room)<sup>17</sup>が展示されていた。『セント・ア・レター』は蛇腹がすべて開いた状態で置かれ、一目で本の全体を見

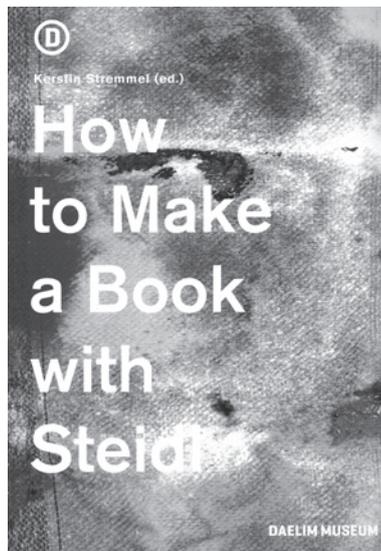


図2  
「シュタイデルとの本の作り方」展  
図録、表紙

❖12 Koto Bololo, *I Spy with My Little Eye, Something Beginning with S*, Göttingen: Steidl, 2010.

❖13 シュタイデル社  
「紙への情熱」特設ページ  
<http://www.steidl.de/flycms/de/paper-passion/0714315960.html>  
(最終アクセス 2013年12月30日)

❖14 Jim Dine, *Hellow Yellow Glove: New Drawings*, Göttingen: Steidl, 2012.

❖15 Günter Grass, *Grimms Wörter*, Göttingen: Steidl, 2010.

❖16 Dayanita Singh, *Sent a Letter*, Göttingen: Steidl, 2008.

❖17 Dayanita Singh, *File Room*, Göttingen: Steidl, 2013.

❖18 シリーズ「ファイル・ルーム」は2013年6月1日から11月24日にかけて開催された「第55回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展」(“The 55th International Art Exhibition – la Biennale di Venezia”)のドイツ館や、京都国立近代美術館にて開催された「映画をめぐる美術——マルセル・ブロータースから始める」(2013年9月7日～10月27日)においても同じ形式で展示されていた。

❖19 Ed Ruscha, *On the Road*, Göttingen: Steidl, 2009.

❖20 Jack Kerouac, *On the Road*, New York: Viking Press, 1957.

❖21 ルシエの生い立ちには以下を参照。  
Hayward Gallery. *Ed Ruscha: Fifty Years of Painting*. Exh. cat., London, 2009, p.177.

❖22 Robert Frank, *Les Américains*, Paris: Robert Delpire, 1958.

❖23 Robert Frank, *The Americans*, New York: Grove Press, 1959.

通すことができたほか、『ファイル・ルーム』はクロス装の表紙に貼られた元々の写真を別の掲載カットに差し替える形式で内容が紹介されていた。<sup>❖18</sup>

## 2-2. タイポグラフィ、エド・ルシエ、ロバート・フランク、 カール・ラガーフェルド、ジム・ダイン ——3階と4階の展示について

3階はタイポグラフィの展示から始まった。シュタイデルが好んで用いるアクチデンツ・グロテスク (Aktidenz Grotesk) に加え、タイムズ・ニュー・ローマン (Times New Roman) やユニバース (Univers) といった一般的な欧文書体や、シャネルの印刷物を制作する際のタイポグラフィのルールを刷り上げたものが並べられ、さながら教科書のように文字の扱いについて学ぶことができた。続くコーナーに展示されていたのはクロス装に用いられる布や本文用紙の見本の数々。実際に手にとって質感の違いなどを確かめることができ、本作りの一端を体感できる仕掛けとなっていた。

タイポグラフィに続いて登場したのはエド・ルシエのアーティストブック『路上』(*On the Road*)<sup>❖19</sup>のコーナー。350部限定で刊行されたこの書籍はジャック・ケルアック (Jack Kerouac, 1922–1969) の代表作『路上』(*On the Road*)<sup>❖20</sup>にカットとしてルシエの作品が差し込まれるレイアウトとなっている。ページをめくると、ハドソン社製の自動車やロードサイドのガソリンスタンド、テナーサックスに黒人のジャズギタリストといった、小説に登場するモチーフが立ち現れ、ルシエが深く思いを寄せる『路上』の世界が広がる。壁面にはアーティストブックが見開きごとに額装して展示され、ケルアックのテキストとルシエの作品が織りなす『路上』の世界に触れることができた。そして、スペースの中央に置かれたガラスケースには、アーティストブックのレイアウトのための精微なスケッチが陳列され、数ミリ単位のこだわりで逡巡するルシエの姿がありありと目に浮かぶような展示となっていた。

アメリカ中西部のネブラスカ州に生まれたルシエは、16歳となった1954年、生まれ育ったオマハからフロリダ州マイアミまでヒッチハイクで旅をする<sup>❖21</sup>が、そのすぐあとの1955年から56年にかけて、同じように車でアメリカを旅したスイス生まれの写真家がいた。それがルシエに続いて展示されていたロバート・フランクである。

1958年、フランクは『アメリカ人』(*Les Américains*)<sup>❖22</sup>と題した写真集をフランスの出版社から刊行する。この写真集はアメリカを車で旅した際に撮影した作品で構成され、アフリカ系の人々に対する人種差別など、解決すべき問題を抱えた当時のアメリカの姿が、ときには私的なまなざしを交えて生々しく写しとられている。アメリカでは一年遅れて1959年に出版される<sup>❖23</sup>が、その序文を書いたのは1957年に発表した『路上』により、一躍人気作家の仲間入りを果たしたケルアックであった。

フランクの『アメリカ人』はその後いくつかの出版社から判型やレイアウトを変えたバージョンが出版されることになるが、最初の刊行から50年の節目にあたる2008年、シュタイデル社から「ロバート・フランク・プロジェクト」(“The Robert Frank Project”)の

環として『アメリカ人』が出版された。この長期的なプロジェクトはこれまでにフランクが発表した写真集の再版や新作の刊行、映像作品のDVD化などを行うもので、シュタイデルが特に力を入れて取り組んでいる事業の一つである。【図3】『アメリカ人』の再版にあたっては、掲載作品をフランクが所有するヴィンテージプリントからスキャンしたことで、これまでに刊行された写真集ではトリミングされていた部分まで掲載が可能となるなど、すべての工程にフランクが関わり、その意向を十分に汲んだ内容となっている。今回の展示ではその『アメリカ人』の制作過程が明らかにされており、壁面にはフランクの修正指示が書き込まれた表紙や紙面の校正紙が額装して展示されたほか、ガラスケースの中にはこれまでに出版されたすべてのバージョンの『アメリカ人』が陳列され、シュタイデル社版との違いを比較できるようになっていた。

そして、3階の最後のスペースでは、シュタイデル社が制作を担当したチャンネルのコレクションカタログや『リトル・ブラック・ジャケット』(The Little Black Jacket)<sup>❖24</sup>を始めとするラガーフェルドの写真集が展示された。デザイナーのみならず、フォトグラファーとしても活動するラガーフェルドはキャンペーンに用いる写真を自ら撮影することも少なくない。壁面を埋め尽くすコレクションカタログの数々は、長年にわたるラガーフェルドとシュタイデルの信頼関係を物語ると共に、ときにはシュタイデル以上に印刷物の制作に情熱を注ぐラガーフェルドの姿を写し出していた。

階段を上って4階へ向かうと、普段はイベントスペースとして使われる空間全体を使い、ジム・ダインの展示が行われていた。展示はダインが長年にわたって強い関心を寄せるピノキオをモチーフとした版画作品を中心に構成され、まるで技法の特性を確認するかのように、様々な技法を用いてピノキオという同一のモチーフが表されていた。エッチングにより微妙に濃淡を変えて刷り出すなど、自らが望む表現に向け試行錯誤を繰り返す様子は、これまで順番に見てきたルシェやフランク、ラガーフェルドといった作家たち、そして彼らと書籍を作り上げてきたシュタイデルを思い起こさせ、紙と表現をめぐる展覧会の最後にふさわしい内容となっていた。

## おわりに

1階にはシュタイデル社の書籍を販売する特設のミュージアムショップが設けられ、帰り際に多くの来館者が展覧会図録や展示で紹介されていたアーティストの作品集を買い求めていた。ショップで販売されていた書籍には、北島敬三(1954-)の『写真特急便』(Photo Express: Tokyo)<sup>❖25</sup>といった日本の写真家の作品集も含まれ、その売り場は一つの出版社の書籍だけで構成されたとは思えない豊かな広がりを見せていた。

2001年には中平卓馬(1938-)の『来たるべき言葉のために』(For a Language to Come)(1970年)や荒木経惟(1940-)の『センチメンタルな旅』(Sentimental Journey)(1971年)、森山大道(1938-)の『写真よさようなら』(Farewell to Photography)(1972年)、『プロヴォーク』



図3  
「ロバート・フランク・プロジェクト」  
リーフレット

❖24 Karl Lagerfeld, *The Little Black Jacket*,  
Göttingen: Steidl, 2012.

❖25 オリジナルは北島が1979年に自主  
ギャラリー「キャンプ」(CAMP)で  
開催した展示のたびに出版した12冊  
のブックレット。北島が撮影した会場  
写真を収めた特別号を加えて復刻され  
た。Keizo Kitajima, *Photo Express: Tokyo*,  
Göttingen: Steidl, 2012.

❖26 ラガーフェルドのレーベル Edition 7L から発売され、企画と特製函のデザインはラガーフェルドとシュタイデルが手がけた。Christoph Schifferli (ed.), *The Japanese Box*, Göttingen: Steidl, 2001.

❖27 アイヴァン・ヴァルタニアン「写真が表現メディアから、表現そのものとなるまで」、金子隆一、アイヴァン・ヴァルタニアン『日本写真集史 1956-1986』赤々舎, 2009年, p.12

(*Provoke*) (1968-69年)の第1号から第3号を完全復刻し、『ジャパニーズ・ボックス』(*The Japanese Box*)<sup>❖26</sup>としてセット販売するなど、1960年代から70年代という「写真家、デザイナー、出版社による濃厚なコラボレーションが結実することで花開いた写真集の黄金時代<sup>❖27</sup>」を皮切りに、シュタイデルは日本の写真に熱い視線を注いでいる。「シュタイデルとの本の作り方」展の続編が開かれた際には、そこに日本の写真家が登場することを期待しつつ本稿を終わりたい。